

創業60年記念

わたしが読んだ童心社の本

モノたちの弾効だんがい

池内紀

いけうち おさむ／一九四〇年、兵庫県生まれ。ドイツ文学者、エッセイスト。主な著書に『ゲーテさんこんばんは』（桑原武夫学芸賞）、『海山のあいだ』（講談社エッセイ賞）、『二列目の人生』、『恩地孝四郎』（読売文学賞）、『亡き人へのレクイエム』など。



アーサー・ピナード／作
岡倉楨志／写真

広島に原爆が投下されたのは一九四五年八月である。『さがしています』の刊行は二〇一二年七月。六十七年後になお、これだけ鮮烈な弾効ができる。何一つ風化していないし、何一つ風化させない。大惨事をもたらした者たちへの断罪に時効はない。

広島市の平和記念資料館の遺品から十四点が選ばれた。理髪店の時計、十二歳の男の子が両手につけていた軍手、レイコさんの弁当箱、セツコさんのワンピース……。いずれも一瞬にして「孤児」になった。時計は時を失い、軍手の持ち主は行方知れず、弁当箱はひしゃげ、セツコさんはワンピースの中で息が絶えた。炭化した弁当を食べてはならない。

それでも ぼくは さがしているんだ。

レイコちゃんが いえなかった

「いたたきます」を。

アーサー・ピナードは一九六七年、アメリカ・ミシガン州の生まれ。大学を出て来日し、「日本語の中へわけ入って」学び、数年後、広島で「ピカドン」を知った。その一語がまさしく「生きた言語感覚」として核分裂をとらえている。それに相当する英語はないと気がつき、「課題を背負った思い」がしたという。以来十数年して『さがしています』で、めぐりここの課題を果たした。

言葉が何よりの手引き役になったのが、いかにも詩人らしい。ここでは「ピカアアアアアッ」と表記されているが、原爆は閃光を発して炸裂すると、核分裂が「小型の太陽」をつくる。広島では直径約二

百八十メートルの火の玉だった。中心温度は百万度を超え、周辺の地上温度は三千〜四千度にのぼり、一瞬にして人体が消滅する。『さがしています』最後の十四番目が語るとおりである。その日の早朝、銀行へやってきて正面の石段に腰かけ、扉のあくのを待っていた人は、ただ一つの黒い影となって石にしみついた。

いらっしやいませ

あなたも ここに すわってみませんか？

わたしは おしりの

ぬくもりを さがしています。

十四の「カタリベ」の主たちの半分は十代の少年、少女である。「学徒動員」の名のもとに市中で働かされていた。目覚めた生命が、ごく素直に生きようとしたとたん、凶悪な国家が使いつづけた。

作者がモノに託して語ったのは、すべてを客体化するためだ。日本人の好きな情緒や感情は一切いれない。末尾につけられた「この本のカタリベたちのプロフィール」が、ひそかな情報係である。タツヤさんの帽子は頭にへばりついて頭を守ったが、服は皮膚とくっついてはなれず、母親が鉄で切りとった。傷口にわたいたウジはピンセットでつまみとった。がんばったが、タツヤくんはひと月と十日後に死んだ。

ピナードは学びとった日本語を不断に手入れして、強靱な反戦のメッセージをつづった。人間が平然とヒトに不正を働くなかで、モノたちがよく切れるナイフの鋭さで人間の正義を求めている。